

福岡県須恵町立歴史民俗資料館における新しい資料公開のあり方
ボランティアによるデジタルコンテンツ作成

Museum Project 代表 小田勝美

A. はじめに

須恵町立歴史民俗資料館で行っている収藏品データの電子化と、そのデータを使った収藏品資料のインターネット上での公開について述べます。

B. 概要

1. 当資料館について

当資料館は福岡県福岡市の東部に位置する須恵町にあります。町内には中世の山城高鳥居城跡、江戸時代の藩医田原・岡眼科とそれに伴う眼療宿場跡、江戸から明治にかけての福岡藩磁器御用窯である須恵焼の窯跡、明治から昭和の海軍炭鉱新原採炭所跡や運輸省志免鉱業所跡などの歴史的遺産があります。これらの歴史的や民俗的な資料の収集・保存を目的として、当資料館は昭和四十九年七月に開館しました。

近辺には福岡市博物館、九州歴史資料館、九州国立博物館があり、これらの中で当館は地域に密着した独自性が求められています。

2. 収藏品データと保存状態

収藏品のデータは「民俗資料収蔵台帳」という紙のデータカードで管理されています。平成十三年時点でデータカードは約五千枚ありました。

なお、一枚に複数の収藏品が記録されているものが数多くあり、単品にすると約八千五百点になりました。また、長期に渡る収集のため、収蔵庫内で行方不明になっているものや、収蔵台帳に記載されていないものもありました。

C. 状況と活動

1. ボランティア活動の目的

(1) 収藏品や収藏品データの管理システムの再構築を行う（今後の管理運用を考え、データの電子化を行う）。

(2) 収藏品のアーカイブの公開を行う（電子化されたデータをインターネット上で一般公開する）。

これは高山元館長の「資料館の収藏品はすべて町民の財産、ひいては国民の財産であり、すべての収藏品を公開すべきである。」という理念と目的に基づいています。高山氏は当資料館を勇退されましたが、私たちはこの考えを引き継いでいます。

2. ボランティアグループの結成

平成十三年五月設立。当初のスタッフは小田、長崎、吉満、七俵で、その後西野が加わりました。

高山館長（当時）は民俗の専門家（主に職人、農具、陶磁器）、小田は学校職員、長崎はPCコンサルタント、吉満、西野はソフトウェア技術者、七俵は美術教員でコンピュータグラフィックの専門家です。

そのほかにも電子版「民俗資料収蔵台帳」への入力では、地元の高校生も参加しました。

平成十八年度に高山氏が勇退されました。

3. 活動日

基本的に資料館で月に二回、土曜日の十三時から十七時まで行っています。

4. ボランティア活動について

一般にボランティアは無償のため責任を伴う活動を行うことができません。当資料館が行っている「収蔵品データの電子化」や「インターネット上での収蔵品公開」のような継続的で予算を伴う活動は難しいです（予算を伴う事項は館職員にお願いしています）。

逆に利害関係がありませんので、どんな意見でも提案することができます。

5. 話し合い、打ち合わせ

様々な決定は館長と職員、ボランティアの合議によります。一旦決定されたものも再検討される場合もあり、何度も話し合いを重ねることで意思の疎通をはかりました。

D. データベース化の構想と設計

1. 紙ベースの「民俗資料収蔵台帳」の電子データ化

「民俗資料収蔵台帳」の記載項目でデータ化するものを決め、用語を合わせて、（MS社表計算ソフト）エクセルを使って電子データ化しました（後にエクセルをOpenOffice.orgのCalcに変更しました）。

2. デジタル写真撮影

紙ベースの「民俗資料収蔵台帳」には、モノクロ写真が添付してありましたが、台帳の電子データ化に伴い、デジタル写真画像が必要となりましたので、収蔵品の整理と撮影を同時に行うことにしました。

3. データベースの設計

紙ベースの「民俗資料収蔵台帳」を電子データ化している間に「データベースの各項目の検討」と「データベースの検索の検討」を行いました。

(1) データベースの項目

各項目はアチックミュージアムの「民具蒐集調査要目」が基本となっていますが、その項目へ具体的に何を書くのか分かりませんでした。そのため下記と の問題が起こりました。

また、データベースに格納する各項目の字数なども決める必要がありました。

管理や検索のための項目を付け加えました。

分類番号

収蔵品の分類に文化庁が作成した「民俗文化財分類表」に分類番号を付け、独自の「民俗文化財コード表」を作成することにしました。

「民俗文化財分類表」は具体的名称が非常に少ないので、「民俗文化財コード表」には具体的な品名を適宜追加することにしました。

標準名

標準名は何を基準として標準とするかが問題となりました。現状では、正確に定義できていませんが、国語辞典に記載されているものが標準名として望ましいということにしました。しかし、国語辞典に記載されなくても、物品が特定できるものは標準名として採用しています。また、一般の方が、検索しやすくするため、標準名はできるだけ平易な名称にしました。

収蔵番号

すべての収蔵品に番号を付けますが、セット物や組物（同じものが複数ある物）にどのように番号をつけるか検討を繰り返しました。

追加項目

電子データ化した「民俗資料収蔵台帳」に収蔵品の管理や検索が行えるように、項目を追加しました。管理には「収蔵状況」「修復履歴等」「貸出先」、検索で使用する「読み」「カテゴリー」「グループ」を追加しました。

(2) データベース検索での検討

台帳には個人情報や公開に必要でない情報が含まれています。そのため、インターネット上で何をどのように表示するかを検討しました。表示されるデータに個人情報などが記載されている場合は、表示しない他の項目に移し変えました。

(3) 検索ソフトの作成

ネットワーク上に公開するための独自のデータベース検索ソフトを吉満が作成しました。このソフトは約一週間で原型ができ、その後少しずつバージョンアップを続けています。

これは、Calcでテキスト出力されるファイルをデータベースへの入力データとして使用しています。また収蔵番号をキーにして画像データを取り出して表示しています。

(4) トップページ作成

長崎と七俵が自宅でデザインし選定しました。

(5) インターネット上での公開

吉満が自宅にテストサーバーを立て仮運用し、データが約二千件蓄積した一年半後にレンタルサーバーを借り本稼動に入りました。

E. データベースの入力データ作成

1. 収蔵品データの作成

資料館での作業は、収蔵品とデータの同定、大きさの測定、収蔵品に記載されている文字・材料・収蔵品の特徴などのメモを行い、収蔵番号を割り付け、その番号を収蔵品に記入します。このメモを元に電子データ化した「民俗資料収蔵台帳」に転記し、更に必要事項や参考事項があれば書き加えます。

2. デジタル写真撮影

撮影は収蔵品の影が出ないようにライティングに工夫を重ねました。また、特徴が分かるようにアングルにも気を配りました。当資料館にはスタジオが無いので、大きな収蔵品を撮影するための大きな背景が用意できずに苦労しました。

3. 写真管理

撮影した写真は画像ファイルとしてパソコンに取り込みます。

検索で使用できるように、写真のファイル名は収蔵番号にしています。

4. サーバーデータの更新

吉満が写真画像と収蔵品データと一緒にサーバーのデータを更新します。これらの作業は将来資料館で行うようにしなければなりません。

データ管理者が簡単にコンテンツの更新や管理ができるように、更新プログラムの作成を予定しています。

(現状：データを更新する際、個人情報部分は手作業で削除しています。今後自動的に削除する方法を考えています。)

F. 今後の課題について

1. 項目内容

- (1) 資料の分類とその定義ができていないので、民俗資料の名称が確立されず困っています。
- (2) すべての資料館が共通の分類と分類番号を使用していることが理想と考えています。資料としての分類コードは日本もしくは国際間(その作業は大学や国家機関)で基本コードとして確立するべきであり、標準化されることを希望しています。当初は細かく分類はせず、おおまかな分類でも良いと考えています。それだけでも一般の方はもちろん、研究者も検索が便利になるのではないのでしょうか。
- (3) このデータベースは民具に合わせて項目を決めたため、書籍、書類、美術品などには対応できていません。書籍など入力していますが、完全に対応するためには、対象に合わせ項目の追加変更が必要になります。
- (4) 文化庁が作成した「民俗文化財分類表」での分類は欠点が多く、根本的解決ができませんでした。新しい考え方が必要になります。例えば「標準

名」「分類名（標準名を細分化した名称）」「職業」「用途」などにコード番号を付け、その組み合わせにより収蔵品の分類番号を付ける方法です。この方法は検索の多様化が可能になります。これは(2)の物の分類ができているということが前提となります。

2. 電子データの利用

当資料館での特別企画「にわか展」を計画した際に、電子化されたデータを利用して貴重な資料を発見できたなど、このプロジェクトは資料館の活動にも利用されています。

3. 入力支援ソフト

現在データは表計算ソフト（Calc）に直接入力していますが、入力効率のよいソフトを開発検討中です。

4. 後継者

スタッフの役割が決まっていて、一人でも欠けるとほぼ活動が停止します。今後の作業量や追加される活動などを考えますと人手が足りなくなりますので、お手伝いできる方を募集しています。

5. アイデアはいっぱい・・・でも

実際に作業するにあたっては、多くのアイデアが提案されました。しかし機材の関係や手間がかかりすぎるなどの理由で多くは保留しています。

そのほかにも「収蔵品を民俗と考古歴史とに時代で収蔵台帳を分けるのはおかしいのではないか。一つの台帳にすべきではないだろうか。」と高山氏がアイデアを出されています。

G. おわりに（システムの改善と公開）

ボランティアがシステムをゼロから作りあげ、収蔵品データの半分をインターネット上に公開することができました。当然、館職員の援助が無ければできなかったことです。

今後も私たちはシステムの改善を続けるつもりです。

また、将来仕様書・ソフトウェアなどを公開したいと考えています。そのために、ソフトウェアツールなどは、オープンソースソフトを使用しています。

公開したソフトは自由に作り変えてもかまいません。改良点などフィードバックがあれば、わたしたちにとって幸いです。

そして、このシステムを他の資料館が利用して、所蔵している収蔵品や資料を公開していただけることを希望します。

ご意見などございましたらご連絡ください。

連絡先のメールアドレスは、museum@town.sue.fukuoka.jp

ウェブサイトのURLは、<http://www.sue-museum.jp/> です。